

付け加えることができる価値は何か？

～82000 キロ離れてみた経験から～

2

千葉 晃央

ベルトコンベア方式で焼く

到着した翌朝 7 時に朝食会場に行く。入り口で料金プラスの目玉焼きベーコンセットにするか？と聞かれる。お断りをしてセルフ方式の朝食。自動パンケーキマシン、パン焼きマシンが初見だった。パンケーキマシンはベルトコンベア前方で生地を絞り出し、コンベアベルトとその上部が熱くなっていて、流れながら焼けていき、最後にペロンと出てくる。そのため、出口の下に皿を置き、待つことになる。しかし、翌朝にいくとスタートボタンを押しても始まらない。その様子を見ていた別の宿泊客が私に声をかけてくれた。「今日は機嫌が悪いみたいだね…」という感じのことだった。お礼を言って、笑顔を返す。

パン焼きマシンもベルトコンベアである。投入口から食パンを一切れ入れると金網製ベルトの上を通過して両面焼いた状態で出口から出てくる。合理的なのか、非合理的なのかわからない。けれどもエンタメ性はある。



じわじわ動いて焼けて、コロロン！と出てくるのである。その待ち時間も機械の前に立っていて何とも言えない…。しかし、メンテナンスはどう考えても大変そう。パンケーキの機械のように実際不機嫌になっていた。部品点数も多いだろうなあ。

ボートピープルへのサポート

同じ、近いルーツのワーカーが担当する

一か所目の福祉機関へ向かう。NPOでフォスタリング業務、障害福祉業務など幅広く自治体から委託を受けて運営されていた。前回も述べたように、セッションの始めには先住民への敬意を表す。

「今いるこの場所は古くからの伝統的な土地に私たちは今立っている。過去、現在、未来にわたる長老の方々に敬意を表します。この土地の先住民の暮らしがあることをあらためて確認します。現在こうして私たちがその土地で暮らしがあることに感謝を申し上げます。そしてアボリジニの若者の方々へも敬意を表します。オーストラリア固有の植物を育て、そこから食べ物を採取し、伝統的儀式を有します。それらについて変えがたい価値があることを認めます…」概ねこのような文意であったように思う。以上を宣言し行われた。こうしたセッションすべての取り組みにおいて行うことを国は先住民との和解のための行動計画で推奨している。目的は、国が犯した間違いを改善していくことであることは言うまでもない。

先住民の方も、もちろん支援者の一員となって働いている。特にそのルーツの文化や風習を大切にできるよう、同じく先住民の方に対する支援を中心に従事している。また、その文化を大切に、継承する目的のために配置されていた。ルーツやアイデンティティの幸福を追求する役目といえる。

オーストラリアの福祉において、①先住民の方々への支援、②亡命者への支援、③移民への支援が重要であることがこの研修から感じられた。これらは日本では福祉対象者として大きく取り上げられていない状況がある。潜在化されているともいえるし、先延ばしにされているとも言える。



先住民のおおよそ4割が要保護対象ともいわれている。そのギャップを埋める対策が急務であり、そのコミュニティ事態をサポートもしている状況がある。



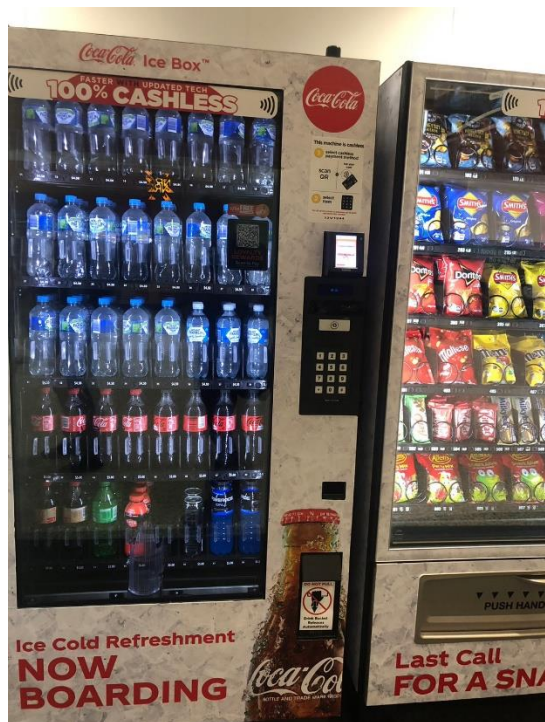
オーストラリアにはクリスマス島というところがある。そこはオーストラリアとはいえ隣国マレーシアのすぐ南である。マレーシアは人口が世界4位。政情不安も抱えている。つまり、そこからのボートピープルがオーストラリアに来るのである。その課題への対処は、オーストラリアにとって継続的な問題として存在している。その対処も時の政府によって、様々工夫がなされ、変遷があった。時には、オーストラリア国外で対処した取り組みもあった。到着する人々へのスクリーニング機能を隣国に依頼し、その見返りに軍事的サポートをするという契約をしたこともあった。こうした隣国との協力関係もあるのかと新鮮に思う。

オーストラリアはイギリスの植民地としてスタートした。その国の成り立ちから考えても移民の国であり、移民への支援は相当歴史があり、支援の経過がある。

福祉職の給与アップではなく、税の免除

現地のワーカーからの話で、かなりの政府機関を外部に委託しているとの話があった。オーストラリアでは、NPOで働く人が人口の15%ぐらいになっているそうである。そのため、NPOで働く職員の待遇も改善せざるを得ない状況があるとのことであった。また、そうした職務の人への給料アップだけではなく、年収がいくらまでの人は税の免除をしているとのことである。こうした免除における福祉の実現はイギリスの社会学者ティトマスが「財政福祉」として、税の減免も福祉政策と整理したことの実践と言えるだろう。福祉を確保するには、福祉職者を確保する必要があるのは当然である。

物価は高い。人数が多いので、フードコートでの食事が合理的ということになり利用することがあった。そこはカジノの施設のフードコート。入り口ではセキュリティが立っており、海外渡航者にはパスポート本体の提示を求めてくる場面もあった。そこだけは、唯一現金での支払いの選択肢が常備されていた。インドカレーをいただいたが32オーストラリア・ドル。2400円ぐらいか？その施設の周辺は、ヤラ川に沿って整備もされ、スタイリッシュでデザインされたビルばかりだった。未来的超高層ビルも、近代アートな橋もあった。





て横で通訳をする。独特な演出でありながら、センスを感じた。

対人援助とテレビ番組の重なり

海外で動画サイトを観ると、広告が海外のものになる。印象深い広告も複数あった。ネット環境は初心者におすすめと教えていただいた「イモトのWi-Fi」。ホームページで申し込み、出発前に自宅に配送。それを持参し、各所で活躍した。福祉機関での学びを終え、部屋に戻り、仕事もしながら、テレビもみた。

あるドラマでは、聴覚障害の主人公女性医師が登場。その医師が会話をするシーンになるとどこからともなく手話通訳が現れて、相手役の人の横に行き、手話通訳を行う演出がされていた。雑踏の中から出てきて、通訳をするときもあるし、後ろの同僚の中に紛れていて、会話が始めると立ち上がった

LGBTQをテーマにしたドラマも、ドキュメンタリーも複数放映されていた。同性同士のキスシーンのあるCMも流れていた。また、出産の奇跡も伝えるドキュメンタリーも印象に残った。登場するのは日本と言えば「新婚さんいらっしゃい!」のようなカップル。タイミングが新婚!ではなく、初産後という設定。番組最後に「来週は…」と次週の予告があり毎週放映であった。

感じたことは、子育てのしやすい社会制度を整備して、多様性に基づいた自分らしさを自由に表現していい! 出産という選択肢の魅力も日々伝えているということである。先進国の宿命である「少子高齢化」に対して、出産も、自分らしい人生という選択も欠落しないよう試みている印象がある。こうしたさまざまな可能性も自由も喚起する仕組みに出会うことになったように思う。

行き交う人もタトゥーも、ピアスも結構な割合の人が選択している。特に若者は8割ぐらいはチョイスをしていた。

れ送られていた。スターウォーズなどのキャラクターのグッズも多く見られた。(続く)

家庭裁判所より特化した、子ども裁判所



チルドレンコート・オブ・ビクトリアは、子ども司法裁判所といったところか。日本の「家庭」という大きな括りよりも、細かく絞っている。司法手続きの遅延で、子どもの福祉が失われないよう特化していると聞く。その裁判所で働く裁判官も、その他の専門職も児童福祉領域の特別なトレーニングを受けて業務にあたることを徹底している。

支援スタート時に児童に送るセットも興味深い。リュックの中にファイルやノート、筆記用具、色鉛筆、ぬいぐるみも主に男児向け、女児向けに分けて想定されてセットさ

